
恋をするのに必要なもの

糸雨 冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋をするのに必要なもの

【Nコード】

N1710BA

【作者名】

糸雨 冷

【あらすじ】

足りないものがあつた。

それでも貴方を求めたのは、私の選択だった。
必要なものは、なんだったのだろうか。

1・君+僕Ⅱ（前書き）

*登場人物

千寿^{ちず}：女の子、女子高生、兄あり、18歳

なっちゃん：男の子、大学生、21歳、千寿の兄の友人

Fortune Fateさんよりお題をお借りしております。

1・君+僕

強く、強く、強く。

私の腕を引き寄せて。

転んで、口付けて、嘘にまみれたの愛を囁く。

深く深く、何もわからないところまで堕ちてしまえばいい。

午後4時30分。

合鍵を使って、部屋に入る。

部屋の中には当たり前のように誰もいない。

だって部屋の主は今バイトの時間だろうから。

冷蔵庫を開けて適当に物色する。

おなかがすいた。

どうせ彼だっておなिकासかして帰ってくるだろうし、何か作るつ。

午後6時を少しすぎた。

冷蔵庫の中身はあまりなく、残り物のご飯を使ってチャーハンを作った。

彼を待たずに食卓でそれを食べていると、玄関のドアが開いた。

「晩御飯作ってくれたなら、せめて帰ってくるまで待つのが普通だと思っただけど。」

「……………おかえり、なっちゃん。」

強く、強く、強く。

私の腕を引き寄せる。

転んで、押し倒して、噛み付くように口付けて……………
なっちゃんは少し乱暴に私を抱く。

とは言っても、私となっちゃんは恋人同士ではない。

いわゆる…………セフレというやつだ。

どうしてこういう関係になったのかは覚えていない。

ただ気づいたらこうなっていた…………とは言っても誘ったのは私だけ
けどそれではどうにもならないので、なっちゃんと私が知り合った経緯から話そうと思う。

なっちゃんは、私の兄の友達だ。

4つ上のなっちゃんと初めて出逢ったとき、私は12歳の小学生で、なっちゃんは16歳の高校1年生だった。

私と私の兄はとても仲がよくて・・・というか、私はお兄ちゃんっ子であり、お兄ちゃんはとてもシスコンだったから、なっちゃんが遊びにきたとき、一緒に遊んでくれたりした。

あれから6年。

なっちゃんとお兄ちゃんは相変わらず仲がよく、それとは別に私となっちゃんは二人だけで会ったりするようになった。

なっちゃんは高校を卒業してから一人暮らしをされていて、その下宿先は私が通う高校の近くだった。

ただなっちゃんが通う大学が私の通う高校の近くにあって、なっちゃんは大学の近くで一人暮らしをしていた、それだけ。

しとすと、雨の降る日のこと。

小雨とは呼べない程度の雨が降っていてもあまり気にならず、私は傘を差さずに駅へと一人歩いていた。

雨は、嫌いじゃないから。

そしてもともと、傘を差すことが好きじゃなかった。

しととしとすと、雨が降る中を歩くと、跳ねた雫が靴下を濡らす。雨に濡れることは小さい頃から好きで、でもやっぱりそれを見ると怒られる。

私が一人暮らしをするなっちゃんの部屋にきたのは、傘を差さずに歩いていた、そんな雨の日。

いつもどおり傘を差さずに歩いていたら、ふと雨がやんだ。

だけど周りを見渡してみると相変わらず雨は降っていて、頭の上を見ると見慣れたなっちゃんの傘が差しかけられていた。

「千寿^{ちず}・・・なんで、傘差してないの。」

私の手には迷った末に差さなかった折り畳み傘が握られており、傘を手に持ちながらも雨に濡れながら楽しそうに歩く私の様子になっちゃんは心底呆れていた。

「雨、楽しいよ。」

私が笑ってそう言うと、呆れた顔のなっちゃんは大きなため息をひ

とつ吐いて自分の家のお風呂を貸してくれたんだ。

腕を引いて引き寄せて、私よりずっと背が高くなっちゃんは斜め下に引つ張られて少しバランスを崩す。

形のいいなっちゃんの唇に自分のそれを押し付け、離れた瞬間目を見てにっこり微笑む。

「ねえなっちゃん、教えてほしいことがあるの。」

千寿のお願い、なっちゃんは無下に断つたりしないよね?」

精一杯甘く口付けて。

腕を伸ばして首に巻きつけ、にっこり微笑む。

その日から私はなっちゃんのセフレ。

君+僕〃 いつもどおりの関係
なっちゃん と ちず は おともだち
普通とは違う おともだち

2・唇・指×唇〃

強く、強く、強く、抱きしめた。

引き寄せて、口付けて、堕ちていった。

だけど俺は、すでに何もわからないところまで堕ちており、言わなきゃいけないことを・・・伝えるのを忘れていた。

「なーっちゃんっ!」

背中に衝撃を受け、俺は思わず顔を引きつらせる。

うだうだと背中からのしかかり、いつこうに離れる様子のないそれ・
・・確かめなくてもわかる。

千尋^{ちひろ}。

高校からの同級生で、大学も同じ・・・千寿の兄貴。

「重たい、千尋。」

文句を言うと千尋は俺の背中にへばりついたまま、こちらをのぞき込んでくる。

千寿によく似た、だけど基本的に無表情な千寿とは違ってころころとよく変わる表情。

ぱっと俺の背中から離れたと思ったら、くるりと俺の前に回ってくる。

性別も年齢も違うからそっくりとは言わないけれど、確かに兄妹である、千寿によく似た千尋。

「なっちゃん、じゅうやくしゅっきーん。

遅刻はいけないんだぞっ！」

「俺、今日は一限ないから別に遅刻じゃないんだけど。」

やけに子供っぽい口調にやけに子供っぽい仕草で、千尋は俺の言葉をスルーして、俺の目の前に指を突きつける。

「・・・お前は人を指差しちゃいけませんって習わなかったのか。」

呆れる俺にお構いなしに、千尋は俺の少し前を歩き出す。

なんでこいつはこんなにもマイペースなんだろうか。

まあ、千寿も結構なマイペースだけでも。

「てかねー昨日も千寿ちゃん遅かったの！どう思う、これ！」

「千寿だってもう高3だろ。友達との付き合いとかあるんじゃないのか？」

いつもどおりの千尋の話を適当に聞き流しながら歩く。

千寿も少しブロン気味だけど、千尋のシスコンは結構なもので、千尋が彼女と別れる原因の多くは千尋のシスコン過ぎる、と言うものだった。

だいたい、20を過ぎた男がシスコンが理由で彼女にふられるってどうなんだ。

……まあ、昨日千寿は俺の家にいたんだけれど。

そんな俺の心の声なんて知るはずもなく、千尋は俺の一步前を歩きながら話し続ける。

もちろん話題の内容は、ずっと同じで千寿のことである。

そう、ひたすら千寿の話続ける千尋に俺が呆れつつも付き合い合ってやるのはいつものことで、それが当たり前だったから、こんなことを聞かされるなんて……まったく予想してなかった。

「気にいらなーいっ！友達がいいとして、千寿ちゃんに恋人なんてまだ早いと思うのっ！」

千寿ちゃんも別に好きじゃない男に言い寄られたってさっさと断っちゃえばいいのに！」

「……は？」

ぼかんと呆けたまま立ち止まったなっちゃんを放置して、俺は歩き出す。

廊下の真ん中で立ち止まったままのなっちゃんは、少し周りの邪魔になっていくけれど・・・いくら声かけても、肩叩いても動き出さないんだから、俺にはどうしようもない。

それにいい加減俺だって、いつまでも進展しないなっちゃんと千寿の関係には飽き飽きしてたんだ。

いつからか・・・だなんて当事者じゃない俺は知らないけれど、傍から見て、なっちゃんと千寿はそれはそれはわかりやすかった。

お互いがお互いを想いあつてることが一目でわかるのに、なんであの二人はとつととくつつかないんだろう？

「……まあ、単なるオトモダチってわけでもなさそうだけど。」

「あーあ、なんかおにいちゃんって損な役割ーっ」

俺は一人歩きながらそう呟いた。

いくら親友のなっちゃんだからって、うちの可愛い妹泣かせたら、許さないんだから。

『千寿は恋人いるの?』

そう聞かれたあの時、いるって嘘をついていたらよかったのかもしれない。

だけど事実、私となっちゃんは単なるセフレで、恋人同士……だ

なんてことはなかった。

だって私、なっちゃんに好きだっていつてない。
もちろんなっちゃんからも、好きだなんていわれてない。

だから私となっちゃんはセフレだし、うっかり彼氏はいないよって
いっちゃった私は、クラスメイトである高瀬君たかせに言い寄られている。

……恋人はいないけど付き合えないよ、って断ったはずな
のに、な。

「千寿、一緒に帰ろう。」

ずっと前に名前で呼んでいいかって許可を出したからか、高瀬君は
私のことを名前で呼ぶ。

以前はそれに不満があったわけじゃないけど、近頃はそれが少し嫌
になってきた。

「……寄りたいたいところあるから。」

自分がどちらかと言うと言葉足らずであることは自覚している。

ただどだいたいの人はこれで断っている、と言うことを理解してく
れるのだ。

ただ高瀬君は強引な性格なのか理解できてないのか、ゆるく断っ
てもその断りを理解してくれない。

「じゃあ、付き合っよ。」

にっこり笑ってそういう高瀬君に、私はそれ以上何か言うことを諦
める。

別に高瀬君と帰るの、嫌なわけじゃないと思う。
ただ高瀬君と帰ると、なっちゃんのおうちにいけないから。

・・・今週入ってから、なっちゃんに逢ってない。

唇 - 指 x 唇 〃 臆病な間接キス
口付けのその先も平気だった
臆病になるのは、言葉だけだった
言っていないことが、たくさんあったの

3・僕×君

高瀬君の話は、おもしろい。

クラスでも人気のある男の子で、友達には付き合っちゃえば？って言われる。

「それでさ・・・」

私は、高瀬君が続ける他愛もない雑談に適当な相槌を打ちながら、私はずっと、なっちゃんのことばかり考えてた。

ぐるぐる、ぐるぐる・・・思考の渦に終わりなんて見えなくて、だけど私が思ってたのはたった一つのことだけだった。

なっちゃんに逢いたい。

なっちゃんに逢えないのが寂しくて、なっちゃんが逢いたくて仕方がなくて。

あんな風をお願い聞いてもらうんじゃなくて、振られるのを怖がるんじゃなくて、ちゃんと自分の気持ちを伝えるべきだったんだ。

そうしなかった、ツケがまわってきたんだ。

すごくすごく悲しくて、なんでもない風に高瀬君の話に相槌を打つのもつらくなってきたとき、後ろから誰かが私の腕を引っ張った。無防備な状態で後ろに強く腕を引かれ・・・私は誰かの胸にぶつかったの。

目を丸くするしかできなくて、頭の中にはクエスチョンマークが飛んでいて、だけど私の頭上から聞こえた声は、私が一番逢いたい人の声だった。

「悪いけど、千寿もらっていくから。」

高瀬君は、私の後ろに立つ人をぽかんとして見上げる。

私にだって、何がなんだかわからない。

なんで・・・貴方はここにいるの？

私と貴方は、単なるセフレでしかないのに。

「悪いけど、千寿はもらっていくから。」

高瀬君がぽかんとしたまま何も言わないことに痺れを切らしたのか、なっちゃんは念を押すように同じことを言った。

そして高瀬君をその場に置いたまま、なっちゃんは先ほどまでの進行方向と逆・・・なっちゃんの家の方へ向かってずんずんと歩く。

いつもは私のペースに合わせてくれるなっちゃんが、私を引きずるように歩く。

私から見たなっちゃんはいつも余裕のある大人のようにだったが、なんだか今日のなっちゃんは、ひどく余裕がないように見えた。

ねえ、なっちゃん。

なんで・・・あんなとこにいたの？

なんで・・・高瀬君といた千寿を連れて行くの？

ねえ、なんで？

ボタン

大きな音がしてドアが閉まる。

私は手持ち無沙汰に玄関に立ち尽くして、なつちゃんを見下ろした。ドアが閉まったと同時に、なつちゃんはドアに背を預けて座り込んだまま。

なつちゃんの顔は本人が頭を抱えているせいで、私からは見えない。

「ねえなんでなつちゃん、あんなところにいたの？」

確かになつちゃんの家から遠くないけど、なつちゃん的生活圏内から若干逸れたあの場所。

なんで、なつちゃんはおそこにいたの？

私が問いかけても、なつちゃんは顔を伏せたまままで答えてくれない。

「なんでなつちゃん、千寿のこと連れて行ったの？」

千寿・・・クラスの子と一緒にだったのに。」

偶然私を見かけたんだとしても、なんで高瀬君から奪うようにして連れて行くの？

明日も学校で会うのに、私はどんな顔をして会えばいいの？

私のいいたいこと、なっちゃんにわからないはずなのに、なっちゃん顔すら上げてくれない。

ねえなんで千寿のこと見ないの？

なっちゃんに逢いたくて、逢いたくて仕方がなかったのは、千寿だけなんでしょう？

わかんないよ・・・なんでなっちゃんがこんなことしたのか、千寿にはわからないの。

わからないと・・・不安で仕方がないの。

「ねえなっちゃん・・・」

「単なるクラスメイトじゃ、ないって聞いた。

告白されて断ったけど、相手は引く気がなさそうだって・・・千尋が。」

なっちゃんは伏せていた顔を少しそむけて不服そうに言う。

お兄ちゃんが余計なことをなっちゃんにいったことはわかったけど、まだ千寿にはわからないんだ。

ちゃんと教えてくれないと、私は的外れな期待をしてしまう。

ねえなっちゃん、教えてほしいことがあるの。

本当は私、別のことを教えてほしかった。

「そうだよ。千寿、高瀬君に好きだって言われた。

でも、そうだとしても・・・千寿にはわからないの。
なんでなっちゃんは、千寿を・・・。」

ずるいのはわかってる。

最初に嘘をついたのは、最初に隠し事をしたのは千寿だった。
千寿が教えてほしかったのは、本当はなっちゃんの気持ちだった。

「ねえ、なっちゃん。

ちゃんと言ってくれなきゃわからないの。

ねえ、千寿は・・・！」

強く、強く、強く・・・。

引き寄せられて千寿はなっちゃんの腕の中。

広いなっちゃんの胸に顔をうずめて、広いなっちゃんの背に手を回す。

ねえ、なっちゃん。

今千寿が欲しいのは、そんなぬくもりじゃないんだよ。
もっと確かな、言葉が欲しいの。

「俺は・・・。」

なっちゃんの腕の中、千寿の耳にずっと欲しかった言葉が飛び込んできた。

溢れた涙はなっちゃんの服に染み込んで、

肯定の返事として小さくうなずいた千寿をなっちゃんはさらに強く抱きしめた。

僕×君〃 望みどおりの恋始め
必要な言葉を紡いだら始まる物語
君のことが、好きなんだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1710ba/>

恋をするのに必要なもの

2012年1月4日11時48分発行